

仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第十二号



評定河原球場(広瀬川河畔)



『遠き山に日は落ちて』(集英社1996年)

文字のある風景

ライト・フィールド

齋木は、ここにくるたびに頭の中で口ずさむ歌があった。アメリカのフォークグループP.P.M.がうたった「ライト・フィールド」という曲である。

少年は、あまり野球がうまくないので、いつも守られるポジションはライト……一試合に一度でも打球が飛んでくるかどうかというライトは最悪のポジションだ。

でも少年は、その場所を自分にとってふさわしい持ち場だとも思い始める。世の中には不器用な人も、鈍い人もいる、だからこそ、自分は、この持ち場を守るのだ、と。

「けれども、今の自分には、この歌詞が親しいものに感じられる」と齋木は思う。「考えてみれば、少年の頃を最後に、自分はずっとライト・フィールドを守ってきたような気がする」

平日の昼間なので、草野球をしている少年たちの姿はもちろんそこにはない。外野に生えている雑草の中に、タンポポの茂みを探すと、黄色い花に綿毛も混じって見つけた。

(佐伯一麦「遠き山に日は落ちて」より)

小池 光の 気になる日本語

「ところ」

中学校の英語の時間でやがて関係代名詞とか関係副詞とかいうものを教わる。わたしが夕べ食べたトコロのものは何々で、とか、屋根の上を歩いているトコロの人は何々で、とか訳す。which, when, where, who... が出てきてもトコロのと訳す。

わたしは、こういうところですので置いて英語が嫌いになった。なんでまるで違う語がトコロの一語でいいのかわからない。また逆にいうと一語で済んでしまう「トコロ」のふところの深さが、へんにぶきみだつた。

最近知ったことだが関係代名詞を「トコロ」と訳す起源は、意外にも漢文である。

「富与貴、是人之所欲也」(論語) 富と貴は、これ人の欲するところなり。

「所」の字をトコロと読み(それは所ならトコロと読むが)、読み下し文にする。漢文の読み下し文の伝統をもって英文も読み、トコロのトコロとやってきたものらしい。

「ところ」は日本語の基本語のひとつで話し言葉においても書き言葉にお

いてもしょっちゅう使うが、よくよく考えてみるとこれは相当ぶしぎなことばである。

ところ変われば品変わる、というときの「ところ」はもちろん場所、土地である。わたしが育ったところは仙台で……というときも無論場所である。漢字なら「所」だから場所であるのは当たり前である。

ところが、ところがだ。いま思わす「ところが」と書いてしまったが、ところがというときの「ところが」は場所ではなさそう。

「ところが」に助詞「が」をくっつけて「ところが」にすると、一挙に逆接の接続詞になってしまうのはどうしてだろう。こういうところが、「ところが」のふしぎなところである。

「いささか思うところが」 という場合の「ところが」は一種の含みを持たせるニュアンスがあるだろう。はつきり言わないところがちょっとこわい感じ。

「今日のところは許してやる」となる限定か。今日は許してくれるが明日はどうするか分からない。今日に限って許す。これも一種の含みといえそうもいえる。

そして、いちばんふしぎに思うのは、時間経過をいうときも「ところが」で片付くというところである。

「いまご飯食べているところです」という日本語の意味は、いわずもがなであるが、いま食事中だということ、場所は関係なく、いまこの時においてただご飯を食べている、ということと言っている。

場所をあらわす「ところが」がいつのまにか時間を表している。空間と時間が交じり合い、融合して混然一体となっている。西欧語ならぜったいにこういうふうにはならないはずだ。空間はどこまでいっても空間で、時間はどこまでいっても時間である。われわれに染み付いたものの感じ方、世界の把握の仕方にはそれは違ったところがあって、空間はどこかで時間の顔を失くしてしまっている。翻訳不可能な日本語のひとつだろう。

木のもとに臥せる仏をうちかこみ象蛇どもの泣き居るところ 正岡子規 看板にあべか餅と書きありて旅人二人餅食ふところ

結句が「ところが」で終わる短歌はたくさんある。ところ止めというひとつのパターンを指摘してもよいくらいだ。近代短歌のはじまりに予規が十首全部を何々のところで収めた有名な連作があるが、こんな歌である。

前首は釈迦入寂図を歌にしたもの。「泣き居るところ」のところは場所か、時間か。後首はぜんぜん違う絵を歌にしたもの。こちらはどうか。食ひ居るところ、なら時間は濃い「食ふところ」ではやや薄い。でも、薄いが時間とまったく関係ないともいえない。「ところが」は実に得体が知れないと思ひ直しているところ。

(仙台文学館館長)

学芸室日記

○4月に館長が作家・井上ひさしから歌人・小池光に交代し、このニュースの紙面も本号から一新しました。今後、さまざまな話題を「特集」としてお届けします。お楽しみに!

○6月、仙台出身の作家・恩田陸さんが「中庭の出来事」で第20回山本周五郎賞を受賞しました。実験的な作品での受賞が嬉しかった、という恩田さん。おめでとうございます!

○秋の特別展は「澁澤龍彦 幻想文学館」を開催します。イメージ豊かな作品で、没後20年を経てなお多くの読者を惹きつける澁澤龍彦。その魅惑的な世界に迷いこんでみませんか? [会期: 9月15日(土)~11月25日(日)]



撮影:相田 昭

杜の風に言寄せて

豊かな世界を紡ぐ、みやぎの女性歌人たち

仙台在住の小説家が脚光を浴びる中、短詩型の分野でも、若手の実力派女性歌人たちが宮城・仙台に住み、短歌を発表しています。そこで今回は、わずか三十一音のなかにそれぞれの豊かな世界をつくり出す、四人の方々にお話をうかがいました。

山上に立つテレビ塔かがやけば東京タワーと子は喜べり

依万智

て生きていることと並行だから。でも、東京と少し距離を置くことで、仕事もワークション置いて使える方、時間のこと、今や、原稿の入稿はフアックスや電子メールで事足りる時代。もの書きが、書く時間や空間といった環境を整えるのに、仙台は適した土地なのではないかと感じている。

「サラダ記念日」から二十年、依万智さんは仙台で初めての夏を迎えた。

「仙台はほどよい規模で住みやすい街。でも、まだ一年住んでいないので、今は、地元の人と

旅人の間という視点で歌を詠んでいる感じです」。

東京を離れたのが昨年秋。引越直後に詠んだ「山上に」の歌は、お子さんの何気ないひとことに、住みなれた土地を後にしたさびしさを託した一首。そのお子さんは、この春から幼稚園に通い始めた。依さんによれば

「幼稚園ママは意外に忙しいんですよ」。歌作も母親業も片手間にできる仕事ではない。だが、「苦勞して歌を作る時間を生み出しているわけではないんです。歌を作ることは、私にとっ



依万智(たわら・まち)さん
1962年大阪府生まれ。仙台市在住。歌集に「サラダ記念日」(第32回現代歌人協会賞)「かぜのてのひら」(チョコレート革命)「アーさんの鼻」(第11回若山牧水賞)ほか、著書多数。「心の花」所属。

「幼稚園ママは意外に忙しいんですよ」。歌作も母親業も片手間にできる仕事ではない。だが、「苦勞して歌を作る時間を生み出しているわけではないんです。歌を作ることは、私にとっ



大口玲子(おおぐち・りょうこ)さん
1969年東京都生まれ。仙台市在住。歌集に「海星(ハイリヤン)」(第43回現代歌人協会賞)「東北」(第1回前川佐美雄賞)「ひたかみ」(第2回葛原妙子賞)。「心の花」所属。

白鳥の飛来地をいくつ隠したる東北のやはらかき肉体は

大口玲子

依さん同様、東京から宮城に移り作歌活動を続けるのが、大口玲子さんだ。

高校生のとき朝日歌壇の投稿歌を読み、「いろんな人の人生が詰まっっていて、小説を読むより面白い」と、大きな衝撃を受けた大口さん。その頃出版された「サラダ記念日」の影響もあり、やがて自らも歌を作り始めるように。

大学では日本語教育を学び、卒業後、中国・長春で四か月間教鞭をとった。旧満州国の記憶を留める街での仕事は、「緊

張したし複雑な気持ちになっただ。長春でも、帰国してからの間も、歌を一首も作ることで済ませました」という。「(中国)を歌おうとして歌えなかった。そんなとき(師事する)佐佐木幸綱先生が、「(中国)じゃなくて(言葉)がテーマなんじゃないの?」と。ああそうか、と思ったら、歌ができたんですね」。以来、社会や言語への意識が反映された骨太な作品を発表し、高い評価を受けてきた。

「歌人の中にも(ことば派)張したし複雑な気持ちになっただ。長春でも、帰国してからの間も、歌を一首も作ることで済ませました」という。「(中国)を歌おうとして歌えなかった。そんなとき(師事する)佐佐木幸綱先生が、「(中国)じゃなくて(言葉)がテーマなんじゃないの?」と。ああそうか、と思ったら、歌ができたんですね」。以来、社会や言語への意識が反映された骨太な作品を発表し、高い評価を受けてきた。

と(内容派)の人がいて、私は(内容派)と言われていると思う」と分析をしつつ、「でも、ことばのテクニシャンにもなりたい」と意欲的。

結婚を機に宮城に来て七年。今も東北大学で留学生に日本語を教えている。近作には、「東北」や「陸奥」といった方言の音を取り入れたものも。宮城県北部の伊豆沼を詠んだ「白鳥の」の歌は、馬場あき子氏が「大きい母」を感じると評し

た一首。読む者の心を震わせる歌を作るにはエネルギーを要するが、短歌への強い思いが大口さんを創作に向かわせる。

「短歌って、ことばに触発されて知らない自分が引き出されることもある、こわい詩型。でも、ふだんの会話では言えないことが短歌では言えるし、小説や評論と違って(ことばが結晶する)という感覚がある。だから、この詩型に賭けたい」。

は多い。「最初は意識しなかったのですが、第一歌集を出す頃から、故郷や東北を詠みたいという思いが強くなって」。実際、歌集の中にはこけしや温泉を詠んだ歌があり、最近青森の三内丸山遺跡をモチーフにした連作で賞を受けた。所属する結社「塔」は京都が拠点。その仲間たちにとって東北は賢治や啄木、寺山修司などがイメージされる地で、心

着ぶくれた子を自転車の前に置き定禅寺通りを走りゆく

駒田晶子

依さん、大口さんの後輩・駒田晶子さんは、ご主人の仕事の関係で仙台在住は三回目だ。生まれ育ちは福島市。中学生のとき、「サラダ記念日」を読み短歌を知る。その後は短歌と関わりのない日々を過ごしていたが、東京でピアノを学んでいた学生時代、大学の図書館で「サラダ記念日」を再び手にした。当時、将来への漠然とした不安を抱えていた駒田さんに、その「再会」は短歌という自己表現の方法をもたらす。

子さんのお母さんでもある。子どもが発することは新鮮でつい歌に詠みたくなるが、「子どもを歌った作品は世の中にたくさんあるので、重ならないようにするのが大変」という苦勞も。定型のリズムのせいか、短歌には「不思議な力」を感じるという。「自分が今ふと何かを感じて歌に詠んだことは、昔の誰かが感じていたことでもあり、未来にもそんなことがあるかもしれない。過去や未来につながっていく感覚を覚えます。その不思議な力にあやかりたいと思っています」。

海星やら海月やら多々沈ませて故里の夜の浜きらめけり

梶原さい子

大口さんが「同じ東北に住む同世代の歌人として、手こわい好敵手」と評する梶原さい子さんは、宮城県唐桑町(現・気仙沼市)の出身。海と山に囲まれた環境で育ち、「小さい頃は、そのへんに落ちていくクラゲをままごとの材料にして遊んでいました」。



梶原さい子(かじわら・さいこ)さん
1971年宮城県生まれ。大崎市在住。高校教員。作品「綿を拘ふ」で三内丸山まほろば文芸公募最優秀賞受賞。歌集に「ざらめ」。「塔」所属。

ふだんは宮城県内の高校で国語を教える。仕事に追われる日常だが、「学校では生徒たちが助けてくれる。短歌も、周囲の人や事柄から何かをいただいたり、作らされてもらっている、時に作らされているという感覚です」と語る。

なぜか今まで

「自分」をあまり歌わなかった。今後は、自然体であることを大事にしつつ、「私であり、私ではない誰かでもある、(東北のひとりの女)を歌いたい」。

自然の歌に感銘を受けました。これが、恋愛の歌や都会の歌だったら違っていかたもしれません」。

その体験からか、梶原さんの作品に「東北性」を指摘する声



駒田晶子(こまだ・あきこ)さん
1974年福島県生まれ。仙台市在住。ピアノ講師。作品「夏の読点」で第49回角川短歌賞受賞。「心の花」所属。